

研究ノート 韓国の蓮華化生図について

著者	片 茂永
雑誌名	比較民俗研究 : for Asian folklore studies
号	24
ページ	225-228
発行年	2010-03-31
その他のタイトル	<Research and Field Notes>Research on Korean Lotus Transformation Icons
URL	http://hdl.handle.net/2241/106307

韓国の蓮華化生図について

片 茂永※

韓国人にとって蓮華化生図はいまだに身近なものとなっている。ということは、中国の竜門石窟や敦煌石窟などのような有名な石窟寺院からみられる世界的な文化遺産でもなければ、奈良県斑鳩町中宮寺所蔵の天寿国繡帳や東京国立博物館における法隆寺献納金銅灌頂幡のような国宝でもない。まさに現代生活に根付いた今の生きた文化なのである。高句麗古墳壁画の蓮華化生図から穿鑿しなければならない韓国仏教美術史からすれば、今の蓮華化生図は過去と現在を繋いでくれる貴重な橋渡しであること間違いない。

ところで今まで私が韓国の寺で見つけた蓮華化生図は数多くあるが、なかでも2009年8月に偶然発見した全羅南道順天市松広面新平里所在の松広寺地蔵殿西面‘夫婦蓮華化生図’が一番記憶に新しい。やや興奮気味で見とれていたこの夫婦蓮華化生図は、一房の黄色い開蓮華から夫婦が愛睦ましく再生する、つまり2人が同時に極楽往生するとても珍しい構図だったからである。開蓮華から神や死者が出現したり蘇ったりするモチーフならともかく、2人が1つの花房から上半身を現す構図は他にあまり例がない。1990年以降の補修の際描かれたらしく、まだ鮮明な筆遣いと彩色が残る。さて、極楽図

という作品名が付いてあることから分かるように、この壁画は明らかに彼岸の世界を表現していたのである。

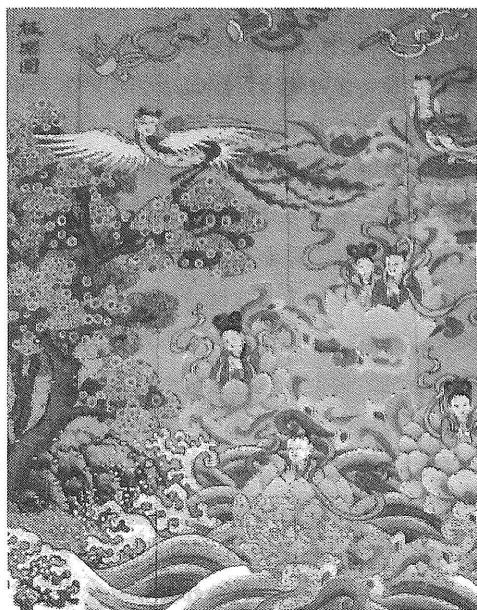


図1 順天松広寺極楽図の部分図

夫婦蓮華化生の右上端では花托が目立つ紅蓮から1人が飛翔を始めるかと思えば、左上端では人面鳥が飛ぶ。この人面鳥は死者の魂であって、遠くはエジプトの壁画や『死者の書』からもみられるので別に仏教だけのものでもなければ、東アジアの固有でもない。それに夫婦蓮華化生のやや左下端には青蓮華から1人が化生しながら合掌する姿が見られるが、この青蓮華はインドから

※愛知大学国際コミュニケーション学部教授

端を発した誤解の産物だろう。つまり自然界には青蓮華は存在しない代わりに青い睡蓮なら存在する。古代インド人は蓮（ハス）と睡蓮をよく混同したらしく、漢訳仏教図にまで青蓮華が実在するかのように伝えられてしまった。

さて、図1でわかるように、以上の蓮華化生はみんな空中を浮遊している姿で描かれていて、まるで船のように水面上に浮いている2人の蓮華化生とは区別される。しかしこの2人も多分、順次空中を浮遊するだろうし、ひいては地藏菩薩のところにも皆と飛翔することになるだろう。

ところで、松広寺の夫婦蓮華化生図が極めて人間的であることは注目に値する。宗教的な目的から描かれたインドの蓮華化生図がアイコンであるならば、極楽往生という人々の素朴な願いが込められた松広寺の壁画はむしろ俗世の願望を素直に言い伝えているからである。松広寺が曹溪宗の発祥地として禅宗の叢林であることを考えるならなおさら夫婦往生という世俗的な絵画は意外性に富んでいる。

ところで、松広寺の意外性が実はかなり根深い文化的土壌のもと伝えられてきた伝



図2 高句麗長川一号墳の夫婦蓮華化生図

承文化である可能性を示唆する壁画がある。それは高句麗古墳壁画であって、中国吉林省集安市の長川一号墳（5世紀中期）前室天井でみつかった夫婦蓮華化生図である。

長川一号墳だけで10点程度の同一構図が発見されたらしく、この壁画からはもう一つの特徴を読み取ることができる。即ち、蓮華の構成だが、‘蕾＋開蓮華＋蕾’という三本蓮華の真ん中の開蓮華から夫婦が産まれ出るように表現されていることである。夫婦の蓮華化生、つまり夫婦で一緒に往生したいという願望は1500年ほど経ったいまもあまり変わってないようだが、‘蕾＋開蓮華＋蕾’の構成だけは松広寺の化生図よりはるか昔の原形に近いと思われる。つまり、蓮華座の三尊仏を連想しながら三本蓮華の構図をインド起源だと断定するかもしれないが、実はそれが古代エジプトから見られるからかなり古くからの普遍的文化であることが分かる。ただ、一つの茎から枝分かれするかのように描かれた理由を私は、一つの球根から数本の枝が生える自然界の睡蓮をよく観察した古代エジプト人の画法と、蓮華蔓草文様を豊饒と多産の象徴として発展させた古代インド人の豊かな画法の東進だと考えている。つまり多文化習合というわけだ。とにかく、夫婦蓮華化生図が発見されたのが古墳という死者の空間であることだけは紛れもない事実であって、さらにこの墓が夫婦合葬墓であることを考えるなら、極楽往生を願う切実な心境が今にも伝わってくるような気がする。

あの世での永生を願う韓国人の心理は、アイコンとして崇めがちだった蓮華化生図をこの世との延長線上で描かせた美術史的な

土台だったかもしれない。しかし一方、図1でも確認したように、1人ひとりの蓮華化生図ならその事例はさらに増える。

たとえば、やはり2009年8月に見つけたなかには、京畿道坡州市広灘面霊場里普光寺大雄寶殿背面の蓮華化生図（図3）がある。木版に直接描いたこの絵は、上端の瓦屋の彩色が剥がれて鮮明ではないものの、極楽浄土であることは、画面ぎっしりの白蓮や化生する死者たちから推し測ることができよう。

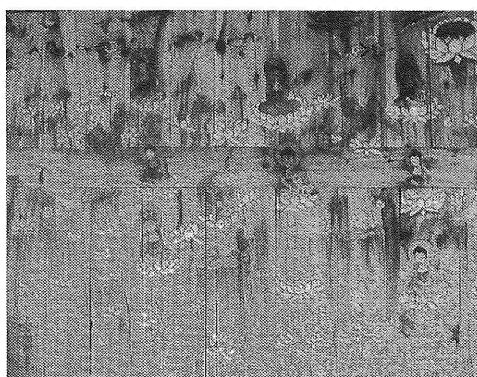


図3 普光寺大雄寶殿背面の蓮華化生図

ここで面白いのは、浄土の仏菩薩たちは等しく白蓮華から死者たちを迎えているが、化生する死者たちは蓮華化生と蓮葉化生の二通りの化生を通して蘇っている事実だろう。色褪せていたので注意してみなければならぬが、確かに死者たちは、白蓮華だけでなく蓮葉からも化生していることを確かめることができる。例えば、左下端では蓮葉の上にはば裸のまま立っている死者が合掌をしていたり、右上端では膝を折って合掌する姿が見えたりする。ここで裸の姿や合掌する姿はただ今浄土往生したばかり

の新しい命や感謝の表現ではなからうか。

そもそも蓮華化生とは、厳密に言えば蓮華化生と蓮葉化生の二つのタイプが実在するにもかかわらず、なぜか一般的には蓮華化生しか注目されなかった。蓮華化生という仏教用語は慣用語のように定着はしていても、現実を反映する言葉とは考えにくい。

最近の他の研究で、蓮華化生をエジプト起源、蓮葉化生をインド起源ではないかと分類を試みたことがある。今のところ深刻な反論にはぶつかっていないが、これからも慎重に検討すべき問題なのである。即ち、睡蓮に基づいたエジプトの蓮華化生からは葉が神聖視されたという証拠はあまりないが、インドではそれが豊富に残っているのである。

さてそれはともかくとして、現代韓国の寺には蓮華化生図が本当に多く、境内の隅々から探し出す楽しみもある。図4は京畿道始興市靈覺寺無量壽殿（本堂）前面の扁額真下から2008年8月に見つけた蓮華化生図である。永生を意味する無量壽だからこそ、それに一番相応しい象徴絵を描いたのだと思うが、でもこの化生図はあまりにも生々しく新しい生命の誕生を物語るからとても分りやすい。裸の9人の子供が蓮華の真ん中に座ったまま、敬虔に合掌する姿となっているが、周りには大きな蓮葉もたくさん浮いていて確かに蓮池であることがわかる。浄土の蓮池なのである。

実はこの蓮華化生図の外にも、靈覺寺境内の隅々には、蓮華紋様を応用した数多くの壁画や丹青が画いてあったり、浮彫りに施されていたりするので、図4のような蓮華化生図は蓮華紋様の森に囲まれた形とい

うか、つまり見逃しやすいほどだ。韓国の寺はいわゆる仏国土の蓮華蔵そのものを所狭しに絵画やレリーフで具現しているからこそ、浄土往生を表現した蓮華化生図は仏教的論理からみても一つの到達点といえよう。



図4 靈覚寺無量寿殿扁額真下の蓮華化生図

さて、図1から図4までの蓮華化生図を鑑賞しながら気づいたことをまとめてみれば次の通りである。一つ目は、特に夫婦や

二人で同時に往生することを願う蓮華化生図を中国や日本をはじめとして、インドや中近東地域にまで範囲を広げてもっと探してみたいということ。それで見つからなかったら韓国の特性としてさらに考究してもいいと思うし、どこかで見つければ、それはそれで比較研究のための貴重な発見につながると思っている。

二つ目は、蓮華化生だけでなく、蓮葉化生も確かに重要な問題だということ。ベトナムでも見たことがある蓮葉化生図を今のところインド起源だとみているが、それが事実ならば、エジプト起源の蓮華化生とともに、‘蓮華文化論’を展開する上で極めて重要な分岐点に立っているのだと考えている。この他にもいくつか気づかされたことはあるが、いずれにしても、蓮華化生図は今の私に様々なことを教えてくれるありがたい存在になりつつある。

新刊紹介

『刀立橋（カルソングリ）を越える - キメとチジョン - 』

済州大学博物館はキメとチジョンについて2005年以来3回の企画展を行っている。本資料は、2009年12月に韓国民俗芸術連合済州支部主催で行われた「刀立橋を越える - キメとチジョン - 」の資料である。展示されたキメとチジョンはヤルチャンボシンバン（シンバンとは済州島のムダンである）によって製作され、展示は同博物館の特別研究員のヤンキミョン氏によって行われた。本資料の解説も同氏による。

刀立橋とは刀が立った橋のことであり人々の通過しなければならない苦難の道を象徴する。展示タイトルは、この苦難の道をキメが表現することに由来する。キメとは済州島のクツの祭場で使用される紙のことであり、チジョンとは神銭のことであり、クツが始まる

前にまずシンバンは紙で白色や色鮮やかな韓紙に切り込みを入れてキメとチジョンを作る。キメはその形によって様々な役割をする。笹に結び付けると神霊を招くときの依り代になり、祭場の周囲一面に吊るされたキメは祭場を浄化し、神を招くにふさわしい雰囲気醸し出す。様々な神々を表す人形のキメもある。チジョンは韓紙に多くの穴を切り開けたものであり神への供物となる。

キメとチジョンはクツの最後には焼かれ決して保存されない。いわば、クツの現場でしか見ることができない巫具であり芸術作品である。本書はキメとチジョンについての貴重な図録である。

（古谷野洋子）
変形版 2009年 済州大学博物館編集・製作